

地域研究委員会地域学分科会（第24期・第3回）議事録（公開）

1. 日時 2018年8月26日（日） 15:00～17:00

2. 会場 東京大学東洋文化研究所（第1会議室）

3. 参加者（敬称略、以下同）

宮町良広、伊藤悟、岩瀬峰代、碓井照子、小田宏信、小林 知、菅 豊、田原裕子、中澤高志、増田 聡、矢野桂司、山川充夫、山下博樹、加藤幸治

4. 議事概要

（1） 前回議事録の確認

（2） 報告

① 菅 豊 連携会員（東京大学東洋文化研究所）

「地域における多様な知の方法の可能性と課題」

「地域社会における自然資源、文化資源の利用や管理のあり方」「日本における公共民俗学（新しい野の学問）」を研究する立場から、まず第23期から参加する中で感じた問題意識や地域学を語ることの困難さが率直に語られた。歴史的に見ると、1990年代以降の社会統治の変容（協働的ガバナンスへ）を背景として、地域学は協働の時代を迎えている。新しい地域学の知識生産のためには、脱学問領域性や協働性、実体的な現場主義などが必要であるが、現実の社会実践にあたっては、価値判断や手法、ヘゲモニーなどの困難が立ち現れる。報告の後半では、自身の研究例、すなわち新潟県小千谷市をフィールドとする闘牛を通じた地域学の非定型な実践について多数の画像を交えて紹介がなされた。報告後には、地元の人々との関係性や研究者の立ち位置について質疑応答がなされた。

② 加藤幸治特任連携会員（東北学院大学文学部）

「地域学からめざす文化における「より良い復興」 津波被災地・牡鹿半島での実践から」

牡鹿半島での社会参加型の実践を事例に、民俗学の手法を使った被災地の文化におけるより良い復興（build back better）について報告がなされた。報告者は、復興キュレーション、すなわち震災後に復旧したコレクションを素材とした文化創造活動を行ってきたが、それをモノの復旧にとどめることなく、むしろフィールドワークの一つのアプローチとして再定義している。保全作業を終えた資料の移動展示会を実施し、そこに集まった地元住民など多様な主体に対する聴き取り調査とそのフィードバックを通じて、文化創造のインタラクションを実践している。すなわち、復興キュレーションが活用可能な地域の文化資源を増やすことにつながり、コラボレーションの相手を増やすことにもつながった。報告後には、ハコ物型の文化復興などをめぐって質疑応答がなされた。

（3） その他

今後のスケジュールについて審議した。

以上